

感想

小樽商科大学プレクトラム・アンサンブル 第36回卒業演奏会

本井 理

毎年恒例の行事となっている「小樽商科大学プレクトラム・アンサンブル」（以下「小樽商大」と略する）の卒業演奏会を聴いたのは初めてですが、筆者の師匠である森田太郎先生が欠かさず通っており、今回は運転手として御供をさせていただきました。

部外にも公開されている行事ですが、性格としては限りなく部内行事に近く、4年生は卒業と新生活の準備、3年生は就職活動のため練習には余り時間が割けない事情も十分に理解しており、筆者としても運よく聴く機会が得られたという認識でしたので、本格的な「演奏会レポート」ではなく、気付いた点を感想としてまとめるのにとどめました。

最大の注目点は2006年度正式者の石田純君（新3年生）と副指揮者の北あす美さん（新2年生）がデビュー戦をどのように飾るかということでした。小樽商大の演奏水準は昨年の定期演奏会終了時点では国内はもとより世界でも最高レベルと評したのはレポートで述べたとおりですが、その一端を担った副指揮者の藤原佑輔君が個人的な事情もあって正指揮者にはならず（部活は続けるとのことで一安心）、代わって正指揮者となった石田君が今後の将来を占うキーパーソンになっています。

石田君は今回3曲を振りましたが、結論は「○」です。藤原君はどちらかという繊密で丁寧な曲を組み立てて行くタイプでしたが、石田君は曲全体を大きく把握して全体の中で各部分がどのような性格を持っているのかを考えて曲を組み立てるタイプです。指揮者としては正反対のタイプですが、曲の捉え方が自然で、どのように作りたいかという意思がはっきりと伝わってくる点で筆者としては非常に好感を持ちました。

ただ、今回の演奏だけでは判断できない懸念材料も挙げておきたいと思います。

第一は、メロディーに重点がある曲が多かったので、リズム感の有無あるいはリズムの重要性に対する認識度については未だに評価が下せません。前正指揮者の室谷隆裕君（新4年生）はこの点が群を抜いて優れていましたが、**撥弦楽器の擦弦楽器や管楽器に対する最大の長所はシンコペーションとシンクロさせることでリズムが明確に表現できることである**という認識を常に持っていれば、素晴らしい演奏ができるでしょう。筆者は過去に石田君と同じタイプの若手指揮者を何人も見てきましたが、メロディー構築が得意であるのかまけてトレモロ奏法のウィークポイントを忘れ、狂気のクボタ・メソッドに嵌ったり、

= 1 =

Copyright©2006,OSAMU MOTOI（本井 理）

昨今害悪の著しいフレーズレス演奏（詳細は「ヴァーロールクインテット」札幌公演に関する演奏会レポートで論じる予定です）に走るなど、道を誤った例を数多く見てきました。

第二は、新コンサートミストレスの八鍬沙希さん（新3年生）との相性についてです。石田君は学生としては珍しくメロディーのツボを押さえるのが上手い指揮者で、その意味では貴重な存在でしょう。一方、今回『アンダンテとポロネーズ』（エドゥアルド・メツァカーポ）を聴いて驚いたのが八鍬さんの著しい上達で、とかく速弾きテクニックばかりを追求しがちな学生マンドリン奏者にあってグリッサンド奏法を積極的に取り入れて感情表現に工夫を凝らしていたのに驚かされました。

石田君は全体の流れを重視しており、自分では「曲が仕上がったらこうなるだろう」という完成像もみえているはずですが。これに対して八鍬さんは、曲が現在差し掛かっている場面で使える最善のテクニックが何かを試行錯誤しながら確定して行くタイプにみえます。

それぞれ指揮者、コンサートミストレスとして相応しい性格で、両者が噛み合えば最高の演奏が期待できますが、コンサートミストレス以下の各首席奏者に対して指揮者が楽曲構築のグランドデザインを十分に説明しなかったり、奏者側が「こんなに工夫して弾いているのに何で指揮者は満足してくれないのか」といった大局的な視点を欠いた不満を抱くと合奏どころか団体運営が壊れてしまう危険を孕んでいます。

なお、八鍬さんには、グリッサンド奏法は音程が下がる場合に用いると効果的ですが、上がる場合は概して用いない方がよいということをアドバイスしておきたいと思います。

演奏では卒業する工藤智弘君（一昨年の正指揮者）が振った『スペイン第二組曲』（鈴木静一）と『降誕祭の夜』（アマデオ・アマデイ）がよかったと思います。練習時間が少なかったため速い部分のテンポは上げられませんでした。作りのよさに感心させられました。

逆にいうと、このまま錬度を上げれば最高の演奏になるということで、やはり指揮者としては逸材であったというべきでしょう。北海道を離れても、ぜひ音楽は続けて下さい。

最後に新副指揮者の北さんへ。上を見れば2003年度正指揮者だった大場慎二君以下、石田純君まで団体史上に残る逸材が5人も並んでいるプレッシャーは大きいと思います。残念ながら、今回の演奏では判断材料に乏しく的確な評価ができませんが、『序曲ニ短調』（サルヴァトーレ・ファルボ＝ジャングレコ）を選曲したセンスはなかなかのものだと思います。「最初から良く仕上げて自分の能力を誇示しよう」といった欲は捨て、かといって遠慮することもなく、やりたいようにやってみたら、きっと好結果が出せるでしょう。

今後も自団体への勧誘を目的として卒業演奏会に来るようなOBの甘言には惑わされることなく、また、感性も知識も欠如している彼らOBのアドバイスなど聞く耳を持たずに自分達の音楽を探求して下さい（2006.03.11.13:30～、小樽商科大学学生会館1階食堂）。